連載

セキュリティ指南書
不正防止の虎の巻

第13回

この連載も早いもので二年目を迎えた。と言う事で今回から新テーマ「アメリカセキュリティ視察ツアー」を始める

前回はあたふたとする警備員について書かせてもらった。正直言えば、その頃と今の大手警備会社の姿勢はそれほど変わっていない。今回からアメリカのセキュリティ情報を生で感じた私だからこそ書ける視点で、新テーマを開始する。「斬、耕平が斬る！」

株式会社A・P総研
代表取締役
中野 耕平
kouhei nakano

アメリカへ視察に行きませんか？

携帯電話の声の主はS社のK社長だった。1999年に入ってすぐの頃だ。彼が業界紙の編集員を辞めた後も、実直な人柄に惚れ、彼が独立した後も付き合っていた。

「アメリカですか？」

「以前から中野さんと話をしていたじゃないですか」

確かにアメリカのセキュリティを生で見たいと言う話を、飲みながら語った事が有る。

「本当に実現したんですね、行きますよ、勿論行きますとも！」

89年のNYCで殺人事件2137件！

それが90年代後半になると600件まで減少した。『犯罪都市』から『安全な都市』へ脱皮を計って成功しているNYC。今回の視察の最大の目的は、その理由を知るためだ。

今回我々は、誰も入る事が出来なかった場所を視察する事が出来た。その模様は「アメリカ読売」にも紹介された。

成田空港出発・・

丁度梅雨時の6月中旬、成田空港に集結した。

北海道のTグループH社長、同じく北海道のVグループM社長、関東の警備会社、S所長とY常務、日立関連のS技師、そしてK氏と私の計7名の少数先鋭部隊である。

パチンコ関係の社長達は、良く知っているどころか弊社の会員だ。その他の方は初対面。機内でも貧乏な私はエコノミーだし、お金持ちの方々は、ビジネスクラスとそれぞれに分かれているので、お近づきになるのはニューヨークNYCに着いてからだ。

＊豆知識：ニューヨークの様に州とシティーの名前が一緒のところでは、シティーにCを付けるのが常識。日本人は平気で「NYに行って来た」なんて言っているが、それは結構恥ずかしい事なんだぜ！

さて翌朝NYCに到着！

迎えのチャーターしたバンに乗り込んだ。

JFK空港からイーストリバーを越え、一時間足らずで宿泊先「シェラトンNY」へ到着。途中で通訳のH女子が、「舌を噛むのであまり喋らないで下さい」と言ったが、まさにその通りで、大都会を走っているとは思えない程の揺れと、錆びれた鉄橋を渡った。

それは許せる。映画で垣間みただけのマンハッタンの光景は、私の胸をときめかせるに十分だったからだ。

しかし、シェラトンで出された朝食に思わず声が！

「なんだ、この味の無いサーモンは!?」

許しがたい程の不味さだった。素晴らしいレストランで、見た目は美しいサーモンソテーが出て来たのだから、期待して口に運ぶのは当たり前だろう。しかし、全く味っけもなにも有ったものじゃない。皆さんも、なんじゃこりゃなんていう顔をしておりました。

「ニューヨーカーは、こんなに不味いものを食っているのか・・」と今回のツアーの行く末を嘆いた。

ライカーズ・アイランド刑務所・・

シェラトンを後にした我々が向かったのは、「ライカーズ・アイランド拘置所＆刑務所」だ。

この時、ガーディアンエンジェルスの小田氏と初めて会った。セキュリティの会話は、通訳のH女子では理解できない単語が出るかもしれないので、小田氏に通訳を依頼していたのだ。市警に顔の効く彼のお陰で、今回の視察が成功したと言っても過言ではない。さらに今に至るまで、これ程深い付き合いになるとは、その時誰も想像し得なかった。

JFK空港からほぼ真北にラ・ガーディア国内空港が有る。その隣を流れるイーストリバーに浮き島の様にあるのがライカーズ島である。

その島の中に刑務所が作られている。囚人に面会に行く為には、その島に渡る橋「ビューノブリッジ」のたもとで、ボディチェック等を受け、車を置き、さらに刑務所の車に乗り換えなければ橋を渡る事が出来ない。

我々は事前に身元を照会し目的を伝えている為、自分達のバンでそのまま渡る事を許可された。当時のNYCは、日本人には緩かったと言える。あの事件が起きるまでは・・。

ついに島へ上陸！

迎えに来たNY市警フランクと共に、約1㎞の橋を渡り島へと入る。島中が有刺鉄線で張り巡らされており、それには数万ボルトの電流が流されている。

まずは刑務所の入り口でカメラやパスポートを取り上げられた。しかし私は「この堅牢な施設を日本に紹介し、あなた達の素晴らしい活動を日本の人々に理解して貰う為には、写真が必要なんです」と力説した。

先の様にこの頃のNYCはおおらかな面も持ち合わせていたようで、一か八かで懇願したら、なんとOKが出てしまった。「やはり真面目なのが顔に出てるんだな～」と一人悦に入る。

まずは拘置所内にて・・・

中は九つの拘置所と一つの刑務所（一年以下の短期間者）となっており、一年間に約13万人が出入りしている。常時1万6～8千人程がいる。

服役日数の平均は刑務所が約30日、拘置所が約45日。

拘置所内は16～18歳の少年と大人とに分かれて収監されており、制服の色も少年がベージュ、大人がカーキ色と区別されている。

島内は宿舎毎のエリアを除き歩く事が禁止されている。但し警備には自転車を利用している。

警備員は必ず緊急連絡用アラームを携帯しており、アラームには個別のIDが登録されているので、誰のアラームが警報を発したのか瞬時にわかる。

このアラームや所内に緊急連絡が入ると、ありとあらゆるところに設置された赤色灯が回転、点滅を始める。

そんな説明を聞いても、そんな事が滅多に有るはずが無いと高をくくっていた。

その時、突然・・！

拘置所から拘置所への移動の通路（壁に覆われている）を歩いていた時だった。

けたたましいアラーム音と共に赤色灯が点滅を始めた！

一瞬にして背筋が凍る！

「皆さん直にこちらに集まって下さい！」

フランクが叫ぶ。

「一体何が起きたんですか!?」

けたたましいアラーム音、ざわめく所内、一体何が？

次回も大いに〝斬らして〟頂こう。

なかの こうへい
1957年高知県出身。大手OA機器販売メーカー・大手建設会社などでの勤務経験の後、パチンコ業界に入る。その後、三十年以上にわたり、パチンコ業界の全てを研究しつくし、各遊技業協同組合でも不正防止講演会に講師として参加するなど、不正防止の知識を広く伝えるべく活動を行っている。

A・P GROUP
記事に関するお問い合わせはA・P総研まで　Tel.03-3202-0971